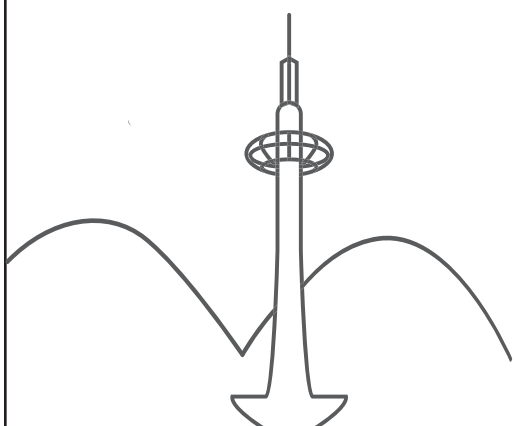


京都 ワカモノガタリ

ツアーのしおり



京都ワカモノガタリ

京都ワカモノガタリは、「学生の街」と呼ばれる京都を舞台に、地域とともに生きる若者たちが紡いできた「物語」を追体験できるイベントです。

京都では、多様な若者たちがそれぞれの方法で地域とつながり、挑戦を続けています。幼馴染の二人組で、世界にコマの楽しさを広める若者。

自分の「好き」を軸に、多世代交流の場を実現する若者。

カレーを通じて人々をつなぎ、仲間とチームを育てる若者。

お寺で子ども食堂を運営し、居場所づくりに挑む若者。

日本の伝統文化を若い世代へと伝え、未来に継承する若者。

若者一人ひとりには、活動への情熱と紡がれてきた物語があります。

このしおりでは、ツアーを案内するナビゲーターたちへのインタビューを通じて、そのリアルな声を届けます。地域と向き合う中で直面した悩み、失敗、偶然の出会いや想定外の出来事。そしてそれらを乗り越えた先で感じた、自分自身や地域の変化。大学の授業や課題では得られない、地域活動の中で見つけた純粋な想い。

ここにしかない「物語」に触れ、あなた自身も新しい一步を踏み出してみませんか？





徳永
朋大
さん

島村
純
さん

JTTF (Japan Top Trick Federation)

この人に出会えるツアー

こま世界チャンピオンと巡る
～京都のこま、これからのこま～

「京こま雀休」の制作過程の見学
およびコマ体験ワークショップ

京こま雀休・梅小路公園
(下京区)

島村 純さん【Jun】

2023 年 Open 部門 世界チャンピオン
近年では選手だけではなく、大会やイベント運営、
ジャッジ、フリースタイルバトルへコマプレイヤー
としての出場などこまカルチャー内外で活躍の幅
を広げている。

徳永 朋大さん【トック】

2023 年 Traditional 部門 世界チャンピオン
教育現場を中心とするこまましパフォーマンス
などを通して多くの方に次世代のこまの楽しみ方
を普及している。



新しいことを始める、「思い立ったらすぐ行動」する

これまでの活動の中で印象的だった偶然の出来事がありましたか？

「まちわし団体【UTF/Japan Top Trick

Federation】を立ち上げたことが、偶然や想定外の出来事を生み出してくれたきっかけになったと思っています。こまの新たな楽しみ方を提示する団体【UTF】を立ち上げ、こまの大会やイベントを主催しています。そうしたイベントを重ねることで日本人の人や世界中の人とつながるきっかけとなりました。世界チャンピオンとなったことで、最近では「こま」をはじめとして大企業と関わるようになってきていることも想定外の出来事だと感じています。また、ツアーでもお世話になる京コマ雀休さんとの出会いも偶然の出来事です。京都市で活動されているコマ職人です。現在、京都市在住の世界チャンピオンであるトック（徳永）とともに「JTOP」という新たなコマの制作を進めています。コマを通じた偶然的な出会いがあったからこそ、ここ京都で新たなプロジェクトが進んでいます。

活動を続ける中で地域や自分自身にどんな変化がありましたか？

新しいことを始める、という点では当初懐疑的な視点で接してくる人がほとんどで、それが当然の態度だと思っています。

ただ、イベントの成功や大会で成績を残すといったように、少しずつ成果が出てくると好意的な態度に変わる人がほとんどです。しかし、成果が出てくる前にも好意的に協力してくれる人も存在していて、そういった人が一番誠実に対応すべき人々ではないかと感じています。

自分の活動を知った人にどうなってほしい？

私たちの活動を知った方々には、「思い立ったらすぐ行動」をして欲しいと思います。私たちの場合は、「これやったらこまわしがもっと面白くなるんじゃない？」と思ったことはすぐに実践してきました。そうして得られた経験が次の原動力となります。準備が整うのを待っていたら寿命を迎えてしまいます。可能な限り早く動いてほしいと思います。



私たちは京都文教大学地域連携学生プロジェクト「KASANEO」に所属しています！ KASANEO は、衣服の「思い出」を通して多世代交流を深める活動を行っています。堀さんは写真やカメラが好きでこのプロジェクトに参加し、今では出会った人々や思い出に感謝する日々を送っています。西村さんは人との対話を通して「好き」や「楽しい」を発見する時間を大切にしています。ツアーでは皆さんの思い出を巡りながら楽しい会話ができたらと思っています！

堀
萌
香
さん

西
村
愛
未
さん

京都文教大学・KASANEO

この人に出会えるツアー

思い出の衣服を私たちはこうつなぐ
～ヴィンテージファッションのあたらしい価値を知るツアー～

モデル・カメラマン体験！
チェキ&スナップ撮影会と展示会参加

KASANEO フェス
(宇治橋通り商店街)



自分の得意・不得意を受け入れてくれる場所

これまでの活動の中で印象的だった偶然の出来事がありましたか？

（西村さん） 人前に出るのは苦手だった自分、大勢の人を前にマイクを使って話すようになったことです。最初は「嫌だなー。私がやるの?」と思いながらやっていたこともありました。活動を続ける中で、「このメンバーとやり遂げたい!」と思い始めてからは、ファッションショーでモデルをやったり、高校生にイベントのアドバイスをしたり、自分が想像もつかないことをしていたなと思います。さらに想定外だったことは、「嫌だ!」という気持ちを否定されなかったことです。メンバーは、人それぞれ得意・不得意があることを肯定してくれる人たちが多かったのです。自分の不得意を隠すことなく活動が続けることができました。

活動を続ける中で地域や自分自身にどんな変化がありましたか？

（堀さん） 活動を通じて知り合ったおじいちゃんおばあちゃんは、顔を覚えてくれるまで時間がかかりました。それはきっと私たちと同じく「高齢者」「若者」と無意識に分類してしまっているからで、その一歩先の「堀萌香」になるために交流の場が必要なんです。話せば話すほど、みんなが私の名前を覚えてくれるのが嬉しかったです。

私の変化としては「得意・不得意を受け入れる」ことができたこと。私が私でいることを、たくさんの人に受け入れてもらえたことで、より自然な自分へと変化していけました。

自分の活動を知った人にどうなってほしい？

（西村さん） 自分の好きなこと、得意なこととは、他の人からすれば役に立つことかもしれないということが、私が活動を通して最も人生に影響を与えた考え方だと思っています。自分の得意を必要としてもらえることは思った以上に嬉しくて、生活のモチベーションにだってなります。なので、ぜひ「好き」を突き通すことをこれらの人生設計に組み込んでもらえたらなと思っています。

（堀さん） 「こういう人でも学生団体やってんだ!」と思って欲しい(笑)。それでも「これがしたい」と思えることをしていれば、人を思いやる気持ちさえあれば、簡単じゃなくてもできちゃうもんです。少しでも「これがしたいな」って思うことがあれば、「してみたい」と思った自分の気持ちを大切にしていれば数日、数か月、数年後にはできるようになっています。すぐに動かなくてもいい、想いが大事です。



京大カレー部で2023年度の部長を務めていた石澤と申します。京大カレー部の活動は大きく内部と外部の2つに分けられます。

内部活動では、不定期で部員が集まりレシピ研究や料理の練習に励むカレー会、インプットを増やすためのカレー屋巡りとインド研修旅行などがあります。

外部活動では、以上のような内部活動で蓄積したノウハウ・レシピ等を活用して地域のイベントや学祭に出店し、時折企業様ともコラボしています。

石澤 遼太郎 さん

京大カレー部

この人に出会えるツアー

カレーよりカオスな人のつながり
～京大カレー部流チームビルディング～

京大カレー部によるカレー試食会
及びカレー部との対話会

BoCS（左京区吉田）





短所を補い、長所の集合となる組織を目指す。

これまでの活動の中で印象的だった偶然の出来事がありましたか？

偶然や想定外の出来事は振り返ってみても、あまり無かったと思います。

その理由には、協力関係にある組織の強さがあったと感じています。例えば、「手続きは苦手だが人をまとめるのは得意な人」、「レシピ作成や調理は得意だが人をまとめるのは苦手な人」、「人をまとめるのは苦手だが手続きはミスなく完遂する人」など、メンバーは各々長短一セットの個性を持っていることが多いです。短所を隠そうとするともう一方の爆発的な個性も無くなってしまうので、チームでお互いの短所をカバーし合い、長所の集合となるような組織を目指すことで大きなミスの無い一年になりました。

活動を続ける中で地域や自分自身にどんな変化がありましたか？

人との繋がりを感じるようになりました。もちろん地域の方に「石澤遼太郎」が認知されているわけではないですが、「今年京大カレー部部長の人」の存在自体を知ってくれている人は多かったです。間接的に認知してもらっていることで、「京都随一のカレーマニアの方」、「京都市内のカレー屋さん」、その他飲食系サークル運営の方との繋がりも自然と出来ていきました。

組織の看板を背負う、個人的な情報発信手段は色々ありますが、何か印象的な肩書き的なものがあると人の記憶に残りやすいのでお得な気がします。

自分の活動を知った人にどうなってほしい？

自分の好きなことや少しでも得意なことがもしあるなら周囲の仲間に見せてみて欲しいです。大学で友人と一緒にいるとしばらく時間が経ってから衝撃的な特技、センスを見せてもらうことがあります。

「急にカレー対決を挑んできて即興でかなり美味しい料理を作る非カレー部員の友人」、「政治家の似顔絵をすごい精度で描き続けている学部友達」、「野菜に精通しているカレー部員」など、自分だと当たり前だと思っていることが気づいたらハイレベルに到達していることがあるので是非周囲の人を巻き込んでみて欲しいです。

その結果、その分野のさらにすごい人と繋がれることもあるので。僕も今後はカレー部外の料理好きとも繋がりたいと思っています。



福本航大さん

京都大学・こども食堂「からふる」

中道亜子さん

福本さんの活動を支える

この人に会えるツアー

あまからこども食堂
～大学生と妙蓮寺の尼さんが紡ぐ居場所～

料理のお手伝い及び見学を通じて
こども食堂における協働事例を探る

あまから食堂
(妙蓮寺玉龍院)

こども食堂「からふる」は京都市内幅広くで活動しており、児童館やお寺さんなどの場所をお借りして自分たちでこども食堂を運営したり、地域のこども食堂にお手伝いに行ったりしています。料理の提供だけでなく、近い距離感で交流することを通じてこどもたちが自由に自分を出せる、学校や家庭とは違う第三の居場所としてのこども食堂となることを目指しています。

僕はからふるの代表を務めており、こどもたちの居場所づくりはもちろん、大学生にとってもからふるが居場所となるよう目指しています。



こども食堂を日常を楽しむ新たな「居場所」にしたい

これまでの活動の中で印象的だった偶然の出来事はありましたか？

からふるは僕たちの代から対外的な活動も始めました。その中で食材を支援してくださる方や社会人の方から「こども食堂がない社会が理想ではないか」と声をいただくことが度々ありました。こども食堂の始まりが経済的に貧困な方への支援というところなので、大人の方にはこういった意見を持っている方がいるのだなと思いました。実際僕もからふるに入る前まではそういったイメージでしたし、社会的なイメージとしてのこども食堂というはおそらくそのような暗いものなのかなと思います。ただ僕たちとしてはこども食堂を居場所と捉えていただきたい、つまりマイナスを補完するものではなくて日常にプラスを付与するものだと考えていただきたい、そのために楽しい活動を地道に続けていこうと思っています。

活動を続ける中で地域や自分自身にどんな変化がありましたか？

僕がからふるを居場所と感じ始めたのは一回生の夏頃でした。それ以前は京都での初めての一人暮らしで、どこか京都に住まわせてもらっている感覚がありました。

からふるが居場所になり、地域の方と交流をしていく中で、ちょっとずつ京都の街が自分のものになっていることを感じています。そうして地域に自分が入っていった中で、心温かい人に多く出会えました。あまから食堂を共同で運営している中道さんもそのうちのお一人ですね。あまから食堂はひとり親家庭の方が多くいらっしゃるのですが、こどもたちの交流だけでなく、親御さんの支えにもなっていってほしい方だと思っています。

自分の活動を知った人にどうなってほしい？

一言で言えばボランティア活動を気軽なものに考えていただければと思います。

僕は元々ボランティアというのは高尚な活動だと思っていたのですが、からふるの活動を通して誰でもできるものだと思うようになりました。ボランティア活動をする上で少なからず責任はありますがごく責任を感じる必要はなく、ボランティア活動って楽しいんだと思っていただいて楽しむようになってくれたらなと思います。



「産廃を減らす、思いを紡ぐ。」

sampai (サンバイ) は、京都西陣の
伝統・地域産業からいただく素材を
使用したアップサイクルアクセサ
リーのブランドです。地域の魅力を、
職人さんの技術を、文化を発信して
いきたいという想いから、“技術の詰
まった端材をアクセサリーにする”と
いう方法で多くの方との良縁をいた
だいています。地域の皆さんに支え
られながら、日々活動をしています。

宮武 愛海
さん

sampai

この人に出会えるツアー

西陣で生まれたストーリー
～地域から販売までの Journey～

西陣と sampai の事例紹介、
アップサイクル、販売体験

下京青少年活動センター
小さな若者博



日本の誇るべき文化を、若い世代に知ってもらいたい。

これまでの活動の中で印象的だった偶然の出来事がありましたか？

大学生の頃から西陣地域に関わる活動をしていました。その中で、西陣織に欠かさない「杼（ひ）」を日本で唯一製作していた長谷川杼製作所が廃業される場面に立ち会い、実際に必要なものが無くなる現実を目の当たりにしました。その時、「やらないといけない」「自分の選択肢として手放して良いのか」という強い思いが芽生えました。着物文化の縮小や、織職人や織機のメンテナンスができる人が減少する現状を見て、日本の誇るべき文化が失われていく危機を多くの人、とりわけ若い世代に知ってもらいたいと思いました。

活動を続ける中で地域や自分自身にどんな変化がありましたか？

西陣織には無駄がないと思われがちですが、実際には見本地がお客様に見せた後に捨てられたり、織物を織る過程で絡まった切れた絹糸が廃棄されることがありました。工房に何度も足を運ぶ中でこうした現状を知り、「もともとあるもの」や廃棄されるものを活用してアクセサリ製品にするアイデアを提案しました。この活動により、産業廃棄物を減らすと同時に、伝統職人の技や、地場産業の危機について伝えるきっかけとなりました。

最近では織物を使った小物販売も増えてきており、地域全体に変化が現れています。

自分の活動を知った人にどうなってほしい？



若い世代には着物をもっと身近に感じ、実際に着られるようになってほしいと考えています。今はムーブメントを起こしやすい時代であり、西陣織がトレンドを塗り替え、一発逆転する可能性もあると思います。地域に触れ、自分の地域や京都とのつながりを感じるきっかけを作りたいです。「地域イベントがあるから行ってみよう」といったように、身近なものに興味を持ってもらえたら嬉しいです。

私たちの活動をきっかけに事業者や職人の方々が「自分たちもできるのでは」と感じ、地域素材の活用が広がり、産廃が減ることを目指しています。Samoriを入口として、アイデアを届け、人を増やしていくことを続けたいです。若者がその役割を担うことで、持続可能な未来を作りたいと願っています。

「京都ワカモノガタリ」ツアーのしおり

発行：京都市・公益財団法人 京都市ユースサービス協会

編集・デザイン：鳥井直輝（京都市立芸術大学）

※このしおりは 2024 年 12 月 15 日のイベントのために制作されました。

